

～緊急事態宣言が明けました、少し遠くへも行きたいですね～

ザックリと

<今月もこのテーマです>

お話します

心理検査と知能検査について

WISC-IV (ウィスクフォー)

この検査は5歳から16歳のこどもを対象にしたもので、検査者とこどもが1対1で実施します。問題の流出を防ぐために検査の詳しい中身は書くことが出来ないルールになっています。

検査時間は大体1時間半程度です。この検査で分かるものは「全IQ」というIQに相当する数値と、知能の中の4つの要素で「**言語理解**」「**知覚推理**」「**ワーキングメモリー**」「**処理速度**」です。これらは標準得点として平均を100とした数値で算出します。これを「指標得点」といいます。

<言語理解>

主に言葉の理解力、言葉でのやり取りの力を測るものです。この能力が高いと言葉での指示は通じやすいですが、低めだと言葉だけのやり取りでは不十分で困ってしまう場面も見られます。例えば図や写真、絵で視覚化するなど、本人が得意で理解しやすい方法に置き換える工夫が良いとされています。

<知覚推理>

新たな場面で推理や推測をしたり、合理的な行動ができるかどうかを測るものです。つまり、蓄積された知識ではなく、その場の状況に応じて対応できる力ということになります。この能力が高いと、教室や職場での新たな場面での適応がやすく、低いと、こどもに「よく考えて行動しなさい」と推理を促すと戸惑ってしまうので、あらかじめ行動の仕方や見通しを教えてあげると良いでしょう。

<ワーキングメモリー>

見たり聞いたりしたことを、記憶に一時的に保存しておくこと、短期記憶の能力です。例えば新しい仕事のやり方や、数学の公式などを一時的に覚えておき、それを使ったりすることです。一方、自転車の乗り方や自宅の住所などはワーキングメモリーではなく、「長期記憶」と呼ばれ、同じ記憶力でも区別されます。ワーキングメモリーが高いと、一度聞いたことを覚えて苦もなく作業に取り掛かれますが、低めだと、指示しても覚えられずに10秒くらいたつと忘れてしまい、「なんでさっき説明したのに分からないの」と叱られてしまうことがよくあります。自尊心の低下などの二次的な問題にも繋がりがやすいため、ワーキングメモリーが低めのこどもには、メモ帳やタブレットを持たせて指示されたことを記録するなどの対処方法を教えたり練習させたりすることも大切になります。この検査で測るのは聴覚的ワーキングメモリーです。

<処理速度>

作業を処理するスピードのことです。例えば間違い探しが得意なこどもは、視覚的な処理速度が優れていると言えるでしょう。処理速度が高いこどもはテキパキとその場の状況に応じた作業ができますが、低いこどもの場合は「時間が掛かってもいいから落ち着いてゆっくり正確にやろう」と声掛けをしてあげたいものです。「もっと早く」と言われると「頑張っているのにできないよ」と自信をなくしてしまいます。

※実際の検査はこのイラストのように行います→

※参考文献：合同出版/「子どもの心理検査・知能検査」より抜粋

